Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2015, Vol.24, 29-38

論 文

鹿児島県の複式学級における社会科学習に関する調査研究
－単式学級との比較や同単元同内容指導の可能性に着目して－

田　口　紘　子［鹿児島大学教育学部（社会科教育）］・名　切　丈　史［鹿児島大学大学院教育学研究科］
菊　永　俊　郎［鹿児島市立大明丘小学校］

A survey on social studies education at combined class in Kagoshima prefecture -Focusing on the differences with single grade class and the possibility of same unit and matter teaching-

TAGUCHI Hiroko・NAKIRI Takeshi・KIKUNAGA Toshiro

キーワード：小学校社会科、複式学級、鹿児島県、質問紙調査

Ⅰ　問題の所在

本稿は平成25年度鹿児島県における複式社会科教育の状況とそれに携わる小学校教員の意識を明らかにすることを目的とする。現在、複式社会科教育は地域の実情に応じてさまざまな方法で行われており、社会科という教科の特性からくる困難も単式学級以上にあると予想される。県内で実際に複式教育に携わる教員の考え方および課題や要望を把握することは、複式社会科教育の実情に応じた教育研究や教員養成の実現のために欠かせないと考えられる。

Ⅱ　調査の方法

本研究では、平成25年度に複式学級を有すると考えられる鹿児島県内の小学校240校[1]に対し質問紙調査を実施した。質問紙は2014年2月21日に送付し、3月14日を回答締切に設定した。返送のあった学校は137校[2]（回収率59.3%）たったが、同一校内の教員2名がそれぞれ回答した2枚の質問紙を返送している学校が2校あり、返却は合計139枚となった。

質問紙の調査項目は表1のように4つのパートに区分した。パート1には質問紙回答校の平成25年度の学級編成と社会科学習方式について自由記述で回答する3問を設定した。パート2は複式社会科授業の事前・事中・事後に関する22項目ついて、単式学級と比較した教員の感覚を選択肢から回答してもらった。パート3では第3学年から第6学年の社会科小単元として43項目を挙げ、小単元ごとに同単元同内容指導が可能かを選択してもらった。最後のパート4には社会科学習ガイドの育成および複式社会科学習について工夫や課題を自由記述で回答する2問を用意した。

表1：調査項目のパート構成

パート1	あなたの学校の複式学級編制と社会科学習方式について
パート2	複式社会科授業全般について
パート3	同単元指導の可能な社会科単元について
パート4	学習ガイド育成と複式社会科の課題や要望について

（筆者ら作成。）

集計に際しては、多肢選択型の問いは答えを単純集計し，回答傾向の量的な把握を試みた。自由記述については記述の内容を分類・整理し，量的あるいは質的な傾向を把握するよう努めた。

以下では設問ごとに調査の結果を示していく。

Ⅲ　調査の結果

1．パート1：複式学級編制と社会科学習方式

（1）複式学級編制

問1の設問は次のようにした。

> 問1　あなたの学校における平成25年度の学級編制を教えてください。
> 例）1年：単式／2・3年：複式／4年：単式／5・6年：複式

各校の記述から学級の学年編制を集計し、順則複式学級のみか変則複式学級が含まれるのか[3]に着目して整理したものが表２である。たとえば表２「順則複式学級」の「５・６年複式」の行を横に○の箇所を見ていけば、５・６年の複式学級と１年、２年、３年、４年の単式学級を有する学校が７校、５・６年の複式学級のみを有する学校が２校あったことを示している。最下の行には学級編制ごとに学級数を示した。なお特別支援学級については、質問文で明確に指示していなかったために挙げている学校と挙げていない学校があると考えられ、今回は集計を行わなかった。

表２より複式学級を有する137校の回答校のうち、３・４年と５・６年の複式学級を有する学校が42校（31%）と最も多い。これは１年を含む複式学級の児童数は８人まで、１年を含まない場合は16人までとする基準の違いが影響した結果と考えられる[4]。２番目に多いのが39校（28%）の完全複式、３番目は３・４年の複式学級のみを有する22校（16%）となる。表２では欠学年による単式学級も多く見られ、児童の転出入によって学級編制の変動も大きくなることが容易に予想される。

（２）社会科学習方式

問２では①３年生以上の社会科学習方式と②その方式の採用理由を尋ねた。

> 問２　３年生以上の学年を含む複式学級における社会科学習方式について教えてください。
> ①　社会科学習方式（AB年度方式あるいは学年別方式）
> 例）問１例の学級編制の場合）　２・３年複式：２年生は異教科，３年生は社会科を指導する学年別方式／５・６年複式：AB年度方式
> ②　そのような社会科学習方式を採用する理由

137校のうち３校はパート１の問２以降すべて無回答となっていたが、社会科のない１・２年複式学級のみを有しており、３年生以上は単式学級

表２：回答校の学級編制

		順則複式学級			変則複式学級			単式学級						合計学校数		
		1・2年	3・4年	5・6年	2・3年	4・5年	3・5年	1年	2年	3年	4年	5年	6年			
順則複式学級	1・2年複式 3・4年複式 5・6年複式（完全複式）	○	○	○										39	39	137
	1・2年複式 3・4年複式	○	○									○	○	3	7	
		○	○									○		2		
		○	○										○	2		
	1・2年複式 5・6年複式	○		○						○				4	8	
		○		○							○			4		
	3・4年複式 5・6年複式		○	○					○					5	42	
			○	○										3		
			○	○				○						2		
			○	○				○	○					32		
	1・2年複式	○								○	○	○	○	2	3	
		○									○			1		
	3・4年複式		○					○	○			○	○	16	22	
			○											3		
			○					○					○	1		
			○						○			○	○	1		
			○									○	○	1		
	5・6年複式			○				○	○	○	○			7	9	
				○										2		
変則複式学級を含む		○					○							1	7	
				○	○									1		
					○							○		2		
					○								○	1		
					○									1		
						○			○					1		
合計学級数		58	110	99	5	1	1	58	62	13	14	27	27			

（筆者ら作成。）

か欠学年となっているためであると考えられる。したがって本問の回答学校数は134校となる。回答を複式学級の学年編制ごとにAB年度方式[5]か学年別方式[6]かに着目して集計したものが表３である。たとえば「順則複式学級」の「３・４年」の列を見るとAB年度方式が９学級、学年別方式が100学級、その他が１学級と回答されたことがわかる。学習方式ごとに該当学級数やその方式が選択された理由を見ていこう。

表３：社会科学習方式

	順則複式学級		変則複式学級		
	3･4年	5･6年	2･3年	4･5年	3･5年
AB年度方式	9	5	0	0	0
学年別方式	100	94	5	1	1
その他	1	0	0	0	0
合計	110	99	5	1	1

（筆者ら作成。）

１）AB年度方式を一部あるいは全複式学級で採用

AB年度方式を３・４年で実施している９校すべてが５・６年複式学級も有しているが、５校は５・６年でもAB年度方式を採用し、残りの４校は５・６年では学年別方式を採用している。

３年から６年まで一貫してAB年度方式を採用する５校の理由には、「児童の転出入がない」といった学校の実情、「校外学習が難しい」や「直接指導と間接指導の組み合わせに困難」といった学年別方式の課題を挙げた回答があった。また「集団学習を通して、思考が深められ、拡大されることによって社会的な見方や考え方をより育むことが期待される」といったAB年度方式の意義と社会科の教科特性を結び付けた回答も見られた。

一方、３・４年はAB年度方式で５・６年は学年別方式を採用する４校の理由を見てみると、３・４年については上と同様に校外学習について挙げるものが多く、５・６年については「AB年度に分けることが難しい」という意見が見られた。『小学校学習指導要領』では、社会科の各学年の目標及び内容について３・４年はまとめて示されており、３年と４年が分化されていないことが３・４年でAB年度方式を採用する後押しとなっていると考えられる。

２）学年別方式のみを全複式学級で採用

次に問２①の回答として学年別方式のみを記述した学校について見ていこう。表３より回答校のほとんどが学年別方式を採用していることがわかる。

特に変則複式学級を有する学校では、すべての複式学級で学年別方式を採用している。低学年と中学年や中学年と高学年を組み合わせる変則複式学級においては児童の発達段階の違いも大きく、学級編制の変動の可能性も考慮すればAB年度方式を採用することはかなり困難であるからだろう。

複式学級として順則複式学級のみを有する学校が学年別方式を採用する理由については、記述に含まれる複数の理由を抽出して整理し、表４のように11タイプに分類して集計した。

表４：順則複式学級のみを有する学校で学年別方式を採用する理由

	理由	数	割合
①	転出入児を考慮	55	38%
②	児童の負担や発達段階・生活経験などを考慮	24	17%
⑤	内容の系統性を考慮	15	10%
⑧	学級編制の変動を考慮	13	9%
④	きめ細かな指導や学力向上ができるから	9	6%
⑦	学校の統廃合の計画あるいは県や地区のテスト、集合学習に対応するため	8	6%
③	教師の負担軽減	6	4%
⑨	複式指導の解消が図れるから	5	3%
⑩	AB年度方式のデメリットを避けるため	2	1%
⑥	見学などの活動を考慮	1	1%
⑪	その他	6	4%
	合計	144	100%

（筆者ら作成。）

「①転出入児を考慮」と「②児童の負担や発達段階・生活経験などを考慮」は児童に重点をおいた理由、「③教師の負担軽減」と「④きめ細かな指導や学力向上ができるから」は教師の指導に重点をおいた理由、「⑤内容の系統性を考慮」と「⑥見学などの活動を考慮」は教育内容に重点をおいた理由、「⑦学校の統廃合の計画あるいは県や地区のテスト、集合学習に対応するため」と「⑧学級編制の変動を考慮」は教育行政や学校運営に重点をおいた理由となる。また「⑨複式指導の解消が図れるから」は学年別指導を行う際に２名の教員で両学年を分担することで「わたり」や「間接指導」といった複式指導を行う必要がなくなることを理由としたものである。そして「⑩AB年度方式のデメリットを避けるため」は２個学年の学習内容をAB年度に配分する難しさなどを挙げた

理由を、「⑪その他」は「当然だと思う」などの理由を分類した。

表４より「①転出入児を考慮」（55理由、38%）が一番多く、次に「②児童の負担や発達段階・生活経験などを考慮」（24理由、17%）が多いことからわかるように、児童に重点をおいた理由が上位を占めた。３番目に多い「⑤内容の系統性を考慮」（15理由、10%）では「身近なところから市、県、日本へと学習する方がわかりやすいため」といった学習指導要領社会科の教育課程編成を重視する理由が見られた。また４番目には「⑧学級編制の変動を考慮」（13理由、９%）が挙がっており、「①転出入児を考慮」とあわせ山村留学制度や特認校制度（小規模校入学特別認可制度）への配慮がうかがえる。

問２の①と②を通して、学年別方式を採用している学校の回答の中には学年別指導の際に２名の教員が各学年を分担していることを示す記述が見られる。AB年度方式であっても学年別方式であっても、２つの異なる学年の児童への対応など複式学級特有の複式指導が必要となるが、教員２名による学年別方式の授業であれば複式指導の解消および単式化が可能となる。「⑨複式指導の解消が図れるから」や「⑥見学などの活動を考慮」は、学年別方式のなかでも教員２名による学年別方式が可能な学校の記述と考えられる。

その実施体制については、複式学級担任が一方の学年の社会科授業を行う際、もう一方の学年では校長や教頭といった管理職教員や理科などの補助教員による授業が行われるといった記述や、「３年は担任、４年は１学年の担任が指導（１・２年は合同体育で２年担任が指導しているのでその間に行うようにしている）」のように時間割と教員の配置を工夫しているという記述が見られた。

一方「社会科や理科は、補助教員をつけるか、何らかの方法をとってほしいとお願いしているが、予算（お金）がないからできないのだと思っています」という記述のように、教員２名による学年別方式を実施することが難しい学校もある。自由記述の設問であったために学年別社会科授業を教員１名で行っているのか、２名で行っているのかを判断できない学校も多い。県内の複式指導の実態を把握するための今後の調査課題としたい。

３）その他の学習方式

表３のその他に分類した１校は、３・４年について「一部合同で授業。分かれた場合は，校長が授業（３年生を）」となっていた。後半部分は教員２名による学年別方式に該当するが、前半部分は同単元同内容同程度指導であるAB年度方式に該当するのか、同単元同内容異程度指導に該当するのか判断できなかった。問３ではAB年度方式または学年別方式を基本としながら他方の方式を一部組み入れる単元配列を行っているかを具体的に尋ねたのだが、まさにこの学校が該当すると考えられる。しかし残念ながらこの学校は問３を無回答にしており、単元配列の詳細は不明である。

（３）社会科学習方式

問３は以下のように尋ねた。

> 問３　AB年度方式と学年別方式との折衷案で単元配列をされている場合，その具体的な単元の配列を教えてください。
> 例）Ａ年度は下学年内容，Ｂ年度は上学年内容指導が基本であるが，５年生の〇〇単元はＢ年度で学ばせ，６年生の▲▲単元はＡ年度で学ばせる。

回答用紙の返却があった学校のほとんどが「実施なし」と記入するか無回答だった。回答のあった７校は問２でAB年度方式を一部あるいは全複式学級で採用と回答した小学校であり、６校はＡ年度とＢ年度の単元配分を記述し、１校（Ｚ小学校）は部分的に採用する学年別方式についても記述している。

Ａ年度とＢ年度の単元配分を記述した６校のうち３校はＡ（B）年度で下学年内容、Ｂ（A）年度で上学年内容を扱う。残りの３校のうち１校は単元の具体がないため詳細がわからず、２校の３・４年の単元配分は表５のようになる。表５にある番号はパート３の設問で用いた小単元の番号と対応しており、回答に記述されていた教科書の小単元名から小単元の教育内容を特定した。なお、この２校の５・６年については５年内容と６年内容

でＡ年度とＢ年度を分けている。

表５：３・４年でAB年度方式を採用する学校の単元配列の具体

Ｘ小学校	
Ａ年度	Ｂ年度
3	9
4	10
7	1
8	2
12	5
13	6
14	11

Ｙ小学校	
Ａ年度	Ｂ年度
1	3
2	4
7	9
8	10
12	11
13	5
14	6

（筆者ら作成。）

Ｘ小学校は、Ａ年度で地域の販売・生産（小単元番号３・４、以下同様に括弧内の数字はパート３設問の小単元の番号）、災害・事故（７・８）、県（12・13・14）の学習を行い、Ｂ年度で飲料水他・廃棄物（９・10）、学校のまわり・市（１・２）、歴史的な内容（５・６・11）を学ぶ。Ｙ小学校は、Ａ年度で学校のまわり・市（１・２）、災害・事故（７・８）、県（12・13・14）を学び、Ｂ年度で地域の販売・生産（３・４）、飲料水他・廃棄物（９・10）、歴史的な内容（11・５・６）の学習を行う。

多くの教科書では３年生で昔の道具（５）と文化財や年中行事（６）を学び、４年生で発展に尽くした先人（11）を学ぶところを、両小学校とも連続して歴史的な内容を学ぶようにするなど共通性が見られる。一方、３年生からはじまる社会科の導入的役割を持つ学校のまわり（１）と市（２）の小単元をＸ小学校では年度の途中に配置するなどの独自性も見られ、配置の理由等については追加調査が必要となろう。

AB年度方式を基本に、部分的に学年別方式を取り入れていると回答したＺ小学校の単元計画には、両年度で繰り返して学習される小単元が複数あったり[7]、５・６年複式学級では１月から学年別指導を取り入れたりするなど他にはない配慮や工夫が見られるが、紙幅の都合で詳細については割愛する。

今後はより詳細な追加調査等を行うことで、Ｘ・Ｙ・Ｚ小学校以外の学校も含めた鹿児島県内の複式学級社会科単元計画の検討を行いたい。

２．パート２：複式社会科授業全般について

パート２では複式社会科授業の事前・事中・事後に関する22項目ついて、単式学級と比較した教員の感覚を「そう思う」「ややそう思う」「単式学級と同様」「ややそう思わない」「そう思わない」の５つの選択肢から回答してもらった。質問文と項目が以下である。

> 複式社会科学習指導に関する各質問事項について，単式学級と比較して先生がそう思われる空欄に〇をつけてください。

		質問事項
事前	1	学年の発達段階や学習内容の系統性をふまえやすい
	2	教材研究や資料の準備等がしやすい
	3	社会科の見学・体験・活動を計画しやすい
	4	地域との協力・連携が容易で，それを社会科授業に活かしやすい
事中	5	学習の問題意識や関心をもたせやすい
	6	児童の社会経験を授業に活かしやすい
	7	地図や統計などの各種資料から必要な情報を読み取らせやすい
	8	社会的事象に関する各種の資料を効果的に活用させやすい
	9	児童の主体的な学習活動を行わせやすい
	10	異学年の学び合いを取り入れやすい
	11	個々の児童に応じた学習指導を行いやすい
	12	児童に社会的事象を多角的・多面的に考察させやすい
	13	児童に社会的事象について公正に判断させやすい
	14	児童に複数の社会的見方・考え方を身につけさせやすい
	15	児童に社会的事象の特色や事象間の関連を説明させやすい

事中	16	児童の学習内容のまとめを，授業のまとめとしてそのまま採用しやすい（教師の加筆修正はほとんどない）
	17	子どもの多様な考えを活かしながら授業を進めやすい
事後	18	社会的事象に関する基礎的・基本的な知識を習得させやすい
	19	本時の目標到達や定着度合いなどを振り返りやすい
	20	学習内容に関連する地域の観察や調査を家庭学習に活かしやすい
	21	学習内容に関する復習を家庭学習に出しやすい
	22	次時の学習内容に関する予習を家庭学習に出しやすい

先述したように回答返却校137校のうち１・２年複式学級のみを有する３校を除き、134校の教員136人分の返却があった。前述の５つの選択肢に加え「無効回答／無回答」で集計し、それぞれの回答人数とその割合を示したものが表６である。「単式学級と同様」という回答が少ない質問事項に着目し、複式学級教員が感じる単式学級との違いを見ていこう。

最も少ないのは「３．社会科の見学・体験・活動を計画しやすい」（「単式学級と同様」６人、４％）であり、本質問に対しては「ややそう思わない」（35人、26%）、「そう思わない」（72人、53%）と圧倒的に否定的な回答が多い。学年別方式で各学年が異なる内容を学ぶ場合、１人の教員の引率で２個学年双方にとっての学習内容となる見学や体験を行うのは非常に難しい。また複式学級を有するへき地などでは、見学や体験の場所や機会がそもそも得にくいことも回答の背景にあると考えられる。

次に少ないのは「10．異学年の学び合いを取り入れやすい」（「単式学級と同様」７人、５％）であり、本質問に対しては「そう思う」（29人、21%）、「ややそう思う」（68人、50%）と圧倒的に肯定的な回答が多くなる。社会的な見方や考え方を広げ深める教科である社会科において、異学年児童の見方や考え方に触れる機会は重要となる。へき地においては子どもの社会経験や生活経験の乏しさも危惧されるが、複式学級には常に異学年の子どもが存在することを積極的に活用した社会科授業を構想する必要があるだろう。

また「２．教材研究や資料の準備等がしやすい」（「単式学級と同様」12人、９％）では「ややそう思わない」（47人、35%）、「そう思わない」（60人、44%）と否定的な回答が多く、反対に「９．児童の主体的な学習活動を行わせやすい」（「単式学級と同様」20人、15%）では「そう思う」（16人、12%）、「ややそう思う」（66人、49%）と肯定的な回答が多い。少人数のため児童主体の学習活動を行わせる機会や時間を確保しやすい一方、児童の主体性を保障するための資料準備などの教材研究には困難を感じていることが推測される。

表６：複式社会科授業に対する単式学級と比較した教員の感覚

	質問事項																					
選択肢	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11	
そう思う	10	7%	1	1%	4	3%	4	3%	6	4%	2	1%	2	1%	4	3%	16	12%	29	21%	13	10%
ややそう思う	30	22%	2	1%	6	4%	9	7%	11	8%	20	15%	14	10%	8	6%	66	49%	68	50%	27	20%
単式学級と同様	45	33%	12	9%	6	4%	50	37%	72	53%	67	49%	69	51%	74	54%	20	15%	7	5%	21	15%
ややそう思わない	21	15%	47	35%	35	26%	30	22%	21	15%	20	15%	26	19%	24	18%	9	7%	10	7%	39	29%
そう思わない	14	10%	60	44%	72	53%	29	21%	13	10%	12	9%	12	9%	11	8%	11	8%	9	7%	23	17%
無効回答／無回答	16	12%	14	10%	13	10%	14	10%	13	10%	15	11%	13	10%	15	11%	14	10%	13	10%	13	10%
合計	136		136		136		136		136		136		136		136		136		136		136	

	質問事項																					
選択肢	12		13		14		15		16		17		18		19		20		21		22	
そう思う	2	1%	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%	1	1%	6	4%	7	5%	2	1%	1	1%	2	1%
ややそう思う	15	11%	8	6%	16	12%	22	16%	19	14%	21	15%	13	10%	15	11%	6	4%	6	4%	6	4%
単式学級と同様	54	40%	73	54%	45	33%	61	45%	51	38%	42	31%	50	37%	51	38%	85	63%	91	67%	87	64%
ややそう思わない	33	24%	27	20%	39	29%	27	20%	32	24%	34	25%	39	29%	32	24%	20	15%	14	10%	14	10%
そう思わない	18	13%	14	10%	23	17%	12	9%	21	15%	22	16%	15	11%	18	13%	10	7%	11	8%	14	10%
無効回答／無回答	14	10%	14	10%	13	10%	13	10%	13	10%	16	12%	13	10%	13	10%	13	10%	13	10%	13	10%
合計	136		136		136		136		136		136		136		136		136		136		136	

（筆者ら作成。）

「11．個々の児童に応じた学習指導を行いやすい」（「単式学級と同様」21 人、15%）では、「そう思う」と「ややそう思う」の肯定的回答（40 人、30%）と「ややそう思わない」と「そう思わない」の否定的回答（62 人、46%）とに二極化している。複式学級は少人数であることから児童一人一人に応じた学習指導が容易であると想像しがちであるが、否定的回答が肯定的回答を上回っている。この二極化の原因として教員の複式学級指導歴の違いが予想されるが、今後インタビュー調査を追加で行うなどして解明していきたい。

本問で尋ねた複式授業の準備や実施には学習方式の違いが大きく影響する。今回の調査では回答者が回答で想定する学習方式を尋ねておらず、AB 年度方式についての回答と学年別方式についての回答を分けて集計することはできなかった。質問方法については今後再検討していきたい。

３．パート３：同単元同内容指導の可能な社会科単元について

パート３では第３学年から第６学年の社会科小単元として 43 項目を挙げ、小単元ごとに同単元同内容指導が可能かを「可能」「工夫すれば可能」「やや難しい」「難しい」の４つの選択肢から回答してもらった。43 項目は鹿児島県内で多く採用されている社会科教科書[8]の小単元名を基本にして、適宜、学習指導要領も参考に作成した。

異学年の学び合いを効率的効果的に授業に採り入れるのならば、異なる２つの学年に同単元同内容指導を行うことが望まれる。本パートでは小単元ごとにその可能性について尋ねた。質問文と項目は以下である。

> ３・４年複式学級と５・６年複式学級の場合の社会科の同単元同内容指導の可能性について，単元ごとに先生がそう思われる空欄に〇をつけてください。

		小単元
	1	身近な地域（学校のまわり）の様子
	2	市（区，町，村）の様子
	3	地域の販売（店ではたらく人）
第３・４学年	4	地域の生産（農家の仕事など）
	5	昔の道具とくらし
	6	地域の文化財や年中行事
	7	災害（火災など）の防止
	8	事故（交通事故など）の防止
	9	飲料水，電気，ガスの確保
	10	廃棄物（ごみ，下水）の処理
	11	地域の発展に尽くした先人
	12	県の様子
	13	県内の特色ある地域の人々のくらし
	14	国内の他地域や外国とのかかわり（世界とつながるわたしたちの県）
第５学年	15	世界の中の国土
	16	国土の地形の特色
	17	国土の気候の特色
	18	我が国の農業
	19	我が国の水産業
	20	これからの食料生産とわたしたち
	21	国民生活を支える工業製品（自動車をつくる工業など）
	22	工業生産と工業地域
	23	工業生産と貿易
	24	情報産業とわたしたちのくらし
	25	社会を変える情報
	26	情報を生かすわたしたち
	27	わたしたちの生活と森林
	28	環境を守るわたしたち
	29	自然災害を防ぐ
第６学年	30	縄文のむらから古墳のくにへ
	31	天皇中心の国づくり
	32	武士の世の中へ
	33	今に伝わる室町文化
	34	戦国の世から江戸の世へ
	35	江戸の文化と新しい学問
	36	明治の国づくりを進めた人々
	37	世界に歩み出した日本
	38	長く続いた戦争と人々のくらし
	39	新しい日本，平和な日本へ
	40	わたしたちの願いを実現する政治
	41	わたしたちのくらしと日本国憲法
	42	日本とつながりの深い国々
	43	世界の未来と日本の役割

前述の４つの選択肢に加え「無効回答／無回答」で集計し、それぞれの回答人数とその割合を示したものが表７である。「やや難しい」および「難しい」という否定的な回答が多かった小単元に着目して見ていこう。

６年小単元となる日本の歴史（30～39）や政治（40）・憲法（41）で否定的回答が多く、単式学級では４年で学習することの多い都道府県（12～14）もやや否定的回答が多い。これは順則複式学級において上学年内容となる小単元が挙げられていると解せよう。歴史や政治・憲法は日常生活の中で子どもたちの目に直接見えるものではなく社会科の学習も難しくなる。またへき地においては県の施設や県内他地域との関わりも目にしにくいことが予想される。特に鹿児島県では離島が点在し、周囲を山に囲まれた市町も多く、県内の地域の特色は多様である一方、他地域を訪問したり他地域の情報に触れたりする機会はそう多くない。複式社会科学習の拡充のためには鹿児島県についての教育内容開発も重要となってこよう。

４．パート４：学習ガイド育成と複式社会科の課題や要望について

最後のパート４では、問１で社会科学習ガイドの育成を、問２で複式社会科学習について工夫や課題を自由記述で回答してもらった。実際の設問は以下の通りである。

問１　社会科学習ガイドの育成に関し，工夫や配慮があれば具体的にお教えください。

問２　その他，複式社会科学習に対する課題や要望などあれば自由にお書きください。

紙幅の都合で詳細な分析結果を示すことはできないが、複数の回答で見られた共通点や複式社会科に特徴的な点を３点挙げる。

（１）他教科とも共通した学習ガイドの育成

まず問１の社会科学習ガイドの育成についてである。学級全員が学習ガイドとなれるよう「輪番制でガイド役をさせている（日替わり・週替わりで実施）」という小学校がある一方、「慣れるまでは，特定の子供をガイド育成し，ガイド学習に慣れさ

表７：同単元同内容指導の可能な社会科単元

	3･4年小単元																					
選択肢	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11	
可能	23	17%	24	18%	22	16%	22	16%	28	21%	28	21%	20	15%	19	14%	14	10%	11	8%	14	10%
工夫すれば可能	57	42%	57	42%	55	40%	61	45%	53	39%	58	43%	53	39%	53	39%	47	35%	52	38%	58	43%
やや難しい	22	16%	23	17%	20	15%	19	14%	22	16%	18	13%	26	19%	27	20%	38	28%	32	24%	32	24%
難しい	12	9%	11	8%	16	12%	12	9%	11	8%	10	7%	15	11%	14	10%	15	11%	18	13%	11	8%
無効回答／無回答	22	16%	21	15%	23	17%	22	16%	22	16%	22	16%	22	16%	23	17%	22	16%	23	17%	21	15%
合計	136		136		136		136		136		136		136		136		136		136		136	

	3･4年小単元						5年小単元															
選択肢	12		13		14		15		16		17		18		19		20		21		22	
可能	13	10%	11	8%	8	6%	18	13%	17	13%	16	12%	15	11%	14	10%	16	12%	14	10%	13	10%
工夫すれば可能	39	29%	42	31%	37	27%	48	35%	41	30%	41	30%	41	30%	41	30%	42	31%	39	29%	40	29%
やや難しい	42	31%	42	31%	45	33%	20	15%	27	20%	27	20%	24	18%	24	18%	22	16%	26	19%	24	18%
難しい	20	15%	20	15%	24	18%	20	15%	21	15%	21	15%	24	18%	24	18%	25	18%	26	19%	27	20%
無効回答／無回答	22	16%	21	15%	22	16%	30	22%	30	22%	31	23%	32	24%	33	24%	31	23%	31	23%	32	24%
合計	136		136		136		136		136		136		136		136		136		136		136	

	5年小単元														6年小単元							
選択肢	23		24		25		26		27		28		29		30		31		32		33	
可能	15	11%	15	11%	16	12%	16	12%	13	10%	14	10%	15	11%	8	6%	7	5%	7	5%	7	5%
工夫すれば可能	35	26%	38	28%	37	27%	41	30%	47	35%	51	38%	52	38%	30	22%	30	22%	29	21%	29	21%
やや難しい	29	21%	27	20%	29	21%	25	18%	19	14%	18	13%	16	12%	28	21%	29	21%	29	21%	28	21%
難しい	25	18%	25	18%	23	17%	23	17%	25	18%	23	17%	23	17%	38	28%	38	28%	39	29%	40	29%
無効回答／無回答	32	24%	31	23%	31	23%	31	23%	32	24%	30	22%	30	22%	32	24%	32	24%	32	24%	32	24%
合計	136		136		136		136		136		136		136		136		136		136		136	

	6年小単元																	
選択肢	34		35		36		37		38		39		40		41		42		43	
可能	7	5%	7	5%	6	4%	6	4%	7	5%	7	5%	4	3%	3	2%	7	5%	6	4%
工夫すれば可能	29	21%	28	21%	30	22%	32	24%	31	23%	31	23%	32	24%	30	22%	45	33%	43	32%
やや難しい	29	21%	29	21%	29	21%	27	20%	27	20%	29	21%	32	24%	35	26%	27	20%	30	22%
難しい	39	29%	40	29%	39	29%	39	29%	39	29%	38	28%	37	27%	36	26%	25	18%	25	18%
無効回答／無回答	32	24%	32	24%	32	24%	32	24%	32	24%	31	23%	31	23%	32	24%	32	24%	32	24%
合計	136		136		136		136		136		136		136		136		136		136	

（筆者ら作成。）

せる」というように初期には学習ガイドを固定する小学校も見られた。この他にも「低学年のうちから段階的にガイド学習ができてくるように訓練する」など、他教科と共通する学習ガイドの育成についての記述が多く、社会科という教科における特有の学習ガイド育成に関する記述は見られなかった。

（2）社会科と学習者のレディネス

問２において課題や要望として挙げられたもののなかで社会科という教科特性と関連するものとして学習者のレディネスへの言及がある。

「自ら意欲的に学習しない子や社会が嫌いだという子と、とても意欲的に取り組む子との差がより激しくなるのが単式と違う」という意見があるように、単式学級以上に学習者の興味・関心を触発していく必要がある。少人数がゆえに一人の児童の気分によっても学級の雰囲気が左右されることは他教科とも共通するが、一般的に社会科を「とても好き」「まあ好き」と回答する児童の比率は他教科よりも低いことを考慮する必要がある[9]。先述したように複式学級を有する学校はへき地に所在することが多いため児童の社会経験が乏しい場合もある。児童の興味・関心を高め、社会科学習の動機づけとなる社会事象の教材化が一層求められると言えよう。

（3）社会科と地域

次に「教室の中で学習したことは現実の社会ではこのようになっているということを実感させるのに難しさを感ずる。」というように、地域と社会科を結び付けた記述も多い。へき地における社会科のあり方を問い直し、地域性を積極的に社会科にいかす視点が必要となる。

特に、へき地であることが社会科学習に大きな影響を与える事例として見学の問題がある。「複式・小規模校では、見学すべきものが近くにないことが多い。（消防、警察、スーパーマーケット、など）遠足時や近隣校と合同で行うなど工夫が必要である。」というように社会科の集合学習の要望もあった。地域を取り上げた新聞記事やYouTubeなどの動画サイトの活用など社会科授業者による教材研究の工夫も考えられるが、「授業前の教材研究や準備に時間がかかる…（中略）…地域を教材化したり，地域を知る時間がほしい」という意見もあり、教員養成や地域の社会科研究会における教材の開発と蓄積など重層的に課題改善に取り組んでいく必要もあると考えられる。

Ⅳ　本調査の示唆するもの

本調査から鹿児島県の複式社会科教育に携わる小学校教員の多様な考え方と課題や要望が明らかになった。回答の傾向性と今後の研究課題をまとめると以下の３点に整理できる。

第１に、多くの複式社会科学習において学年別方式の指導がなされており、複式指導の解消をめざして管理職教員などの協力を得た教員２名による学年別指導も採り入れられていることである。一方で、異学年の学び合いが容易であることが複式社会科の特性という認識もある。学年別方式とAB年度方式とを組み合わせる単元および授業の計画も求められよう。

第２に、複式社会科学習には学習者の社会経験や発達段階などのレディネスが大きく影響すると認識されていることである。在籍する児童の状況によって学級の雰囲気も大きく変化することを考えると、教員が的確に児童の状況や社会科学習のレディネスを見極め、授業計画を立てたり臨機応変に対応したりする力が求められる。複式社会科授業における児童の変容やその要因を把握するケーススタディを積み重ね、一般的な傾向性を明らかにする研究が今後必要となるだろう。

第３に、複式社会科学習とへき地という地域性が密接に関連することである。先ほどの児童のレディネスへの影響以外にも、見学先や地域教材の確保など、へき地社会科教育が抱える課題は看過できない。オンラインでの地域教材の蓄積や隣接校との連携も欠かせない。

本文中に述べたように質問事項の改善や追加インタビューの必要性も明らかとなった。今後も鹿児島県内の複式社会科教育の発展に寄与する研究を継続したい。また社会科に限定せず複式教育研究に鹿児島大学教育学部が携わっていくことは、本調査の記述回答でも見られた地域の要望であり、

本学部の使命でもある。重層的で多様な取り組みを考えていく必要があるだろう。

本研究は、鹿児島県内の複式学級を有する小学校の先生方に多大なご支援をいただきました。記して感謝申し上げます。

[1] 鹿児島県教育委員会編『平成25年度鹿児島県の教育行政』の「V　学校名簿」（pp.120-159）において、「学級数（特別支援学級含む）」の欄の数字から「特別支援学級数」の欄の数字を引き、５学級以下となる国公立小学校に送付した。なお「学級数（特別支援学級含む）」の欄の数字と「児童生徒数（特別支援学級含む）」の欄の数字が同一の場合は単式学級であることが明らかなため送付しなかった。また送付ミスで複式学級を有する可能性のある３校に送付ができなかった。

[2] 質問紙を回答・返却しなかった学校のなかには、欠学年などで複式学級を有していないことを理由に回答・返却しなかったケースもあると予想される。

[3] １年生と２年生、３年生と４年生、５年生と６年生の組み合わせで編制される複式学級を順則複式学級、それ以外の学年の組み合わせで編制される複式学級を変則複式学級と呼ぶ。変則複式学級については解消を求める声も多く、たとえば全国へき地教育研究連盟は、文部科学省の「今後の学級編制及び教職員定数の改善に関する教育関係団体ヒアリング」（2010年２月18日）において小学校２・３年、４・５年の変則複式学級の解消を求める意見を提出している。

[4] 「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」（昭和33年５月１日法律第116号）

[5] AB年度方式とは、２つの学年分の指導内容を合わせ、第１年次（A年度）と第２年次（B年度）に配当し、両学年に同じ単元・内容を同じ目標で指導するものである。複式学級の両学年の児童が一緒に同内容を同程度で学習することになるため、学年差への配慮が求められることになる。

[6] 学年別方式とは、複式学級を構成する上・下学年の児童に対し、学年別の学習内容を指導するものである。１つの教室を半分にわけたり、２つの教室を使ったりなどして学年別に学習空間を区切り、学年別の学習が同時に進むことになる。

　学年別方式で１名の教員が両学年を指導する場合、教師が児童と対面して指導する直接指導の学年と、児童だけで学習を進める間接指導の学年が生じることになる。直接指導と間接指導は両学年にそれぞれ交互に行われることが多く、教師が一方の学年の学習空間から他方の学年の学習空間へ移動することは「わたり」と呼ばれる。両学年分の教材研究を行い、実際の子どもの状況を見ながら臨機応変に複式指導していくなど、教師には高い授業実践力が求められる。

[7] 学校のまわり（１）と市（２）や、わたしたちの願いを実現する政治（40）の小単元が該当する。

[8] 北俊夫ほか『新しい社会』東京書籍、2011年。

[9] ベネッセ教育総合研究所（2007年11月20日登録）「第４回学習基本調査・国内調査　速報版［2006年］」「１　教科の好き嫌い」（http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/sokuho/soku_1_01.html）2014年９月23日取得。